

お茶の間通学の実現に向けて

名古屋外国語大学大学院 インターネット言語教育専攻
田中 健 <kenneth@ken-mai.com>

はじめに

コンピューターが一般に普及し、e-learning というコトバが生まれた昨今、教育の現場でもその有効活用が望まれている。新技術は、いつの時代も、それまで不可能であったことを可能にするものである。新技術たるコンピューターが身近な存在となった今、その可能性を以ってすれば、現代の教育現場が抱える問題に一石を投じることが、ひいてはそれを解決することができるといえよう。これから述べるのは、そんな可能性を追求するソフトウェア構想である。

対象の教育問題

ここで対象にしたい教育の問題は、手足の不自由な障害者や不登校・登校拒否などの諸事情で、実際に自分の足で学校へ行けない、というものである。ここ数年、教室に足を運ぶことが辛いといった理由から、不登校になる生徒（小中学生で平成 14 年度に報告されているだけでも約 13 万人^[1]）が増えてきているのは明らかである。この数字は到底無視できるものではない。

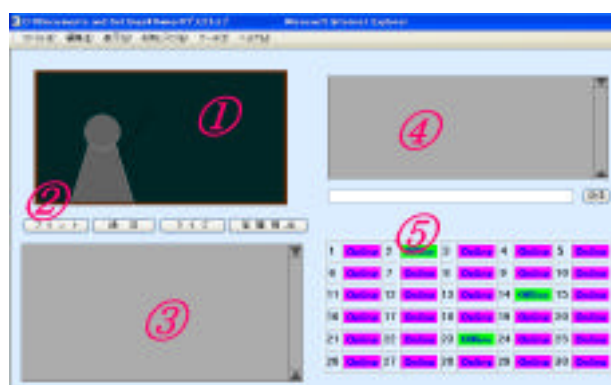
そこで、右に示す図のようなソフトウェアを用いて、自宅に居ながらにして授業を受ける環境を提言したい。これは、実際の教室に限りなく近い空間をインターネット上につくり、文部科学省の学習指導要領にのっとり、教師が生徒に向かってオンラインで授業をするための媒体である。これにより、学校で行われている授業とほぼ同等の授業を生徒が受けられれば、上記の学校に足を運ぶことができないという教育問題の解決の糸口になると考える。

現在の学習指導要領によれば、大学を除き、オンラインの授業で卒業に必要な単位を取れる、とはしていない。しかし、コンピューターが広く認知されてきた現代、それが今後の教育における一つの基盤になるであろうことは十分に予測できる。更には、

オンライン教育が実践されその効果が認められれば、小中高の学校でもオンラインによる単位の取得ができるよう、学習指導要領が改正されるであろう。

ソフトウェアの概要

生徒は授業開始時間までにインターネットに接続し、このソフトウェアの置いてある場所にアクセス、そして、受講するクラスルームにログインする。そうすると、下に示す画面（この画面はログインした最初に現れる生徒側のものである）が現れ、授業を受ける環境が整う。なお、コンピューターを介しての授業とはいえ、生徒は伝統的な学習用具（筆記用具とノート）を用意し、授業に臨むことになる。



の画像

左上にあるのは講師側の映像であり、講師側のコンピューター周辺に取り付けられたカメラが講師の一挙手一投足を映している。つまり、生徒側から教卓を見た状態である。基本的には、使用するのは定点カメラであり、講師がカメラを動かすということはない。この箇所は主に講師の身振り手振りや音声を発信するものである。生徒を映すカメラは存在しない。

のボタン

授業で使用する機能を呼び出すためのボタンが4つついており、それぞれクリックすることによって別ウィンドウで開く。授

業内で使用するハンドアウトを表示するボタン、グループワークで他の生徒との通信を行うためのボタン、授業にまつわるクイズを表示するボタン、やってきた宿題を提出するためのボタン、である。

のテキストエリア

左下は通常のクラスルームでいう黒板で、講師が授業内で解説する文字だけを出力するものである。これはインスタントメッセージに見られるもので、講師がテキストを打ち込むことにより、生徒側にそれが即時送信される。図に関しては、予め講師が作成した画像や授業内で作成した（ペンタブレットも使用可能）画像を別ウィンドウで送ることにより、使用可能となる。

のテキストエリア

講師画像の隣にあるのは、講師・生徒の共通テキスト用黒板で、生徒からの報告や質問、それに対する講師の答えを書き込むものである。黒板の下には1行のテキストエリアと送信ボタンがあり、生徒が書き込んで送信することにより、授業を受けている全員の画面に即時反映される。このエリアに関しては、講師側にロック権があり、生徒が見境なく発言することはできない。

の画像

講師用テキスト黒板の隣にあるのは、受講している生徒の出席状況を示すもので、誰がクラスルームにログインしているかが一目でわかる。出席の確認はもとより、グループワークを行う際にも有用である。

今後の展望と問題点

このソフトウェアが見事開発されたとして、そこで起こりうる問題点を述べたい。第一に、インフラの整備をどうするか、という問題が首を擡げてくる。コンピューターが一般家庭に入りこみつつあるとはいえ、やはりいまだ高価なものであることは否めない。経済的にコンピューターを手に入れない家庭にとっては、開かれた教育シ

ステムとは到底いえないであろう。

次に、回線の問題がある。動画を扱うため、アナログ回線では対応しきれず、ADSLが最低ラインとなるであろう。これはFTHの整備が今後進められることによって解決できるものと思われる。

また、授業の準備をするのに講師の負担が大きいことも否めない。インターネット上ではテキストとイメージは別物である。テキストは単純に処理できても、イメージとなれば、ドローイングソフトを介して作成する必要がある。コンピューターを意のままに操れる講師であれば、この作業は苦にならないであろうが、コンピューターに不得手な講師もいよう。いかに誰もが簡単に教材を用意できるようにするかが、インターネット上のクラスルーム構築の最重要課題といえる。

このオンラインでの授業スタイルを導入する上で、授業を受ける側の生徒に求めるところが大きいのもまた事実である。ある程度言語能力・情報リテラシーのついている中高生であれば、自分なりの学習方法を見つけることができよう。しかし、小学生、特に低学年となれば、学習の第一の目的は読み書きの基礎を確立することである。そんな学習の現場では、正確に文字を書けているか、その都度チェックされるべきである。更に、基本的なコンピューターの扱い方も習得しておかねばならない。こういう見地から鑑みるに、小学校での導入に向けては、聊かハードルが高いと考えられる。

このように様々な障害があるにせよ、近年のその発達を考慮すると、インターネット上が未来の教育の強力な場所になることは、疑うべくもない。ましてや、それが現代の教育現場が対応しきれない問題を解決する糸口になる可能性を秘めているとなれば、今後更に明らかになるであろう種々の障害は、乗り越える価値のあるものと信ずるものである。

このソフトウェアの試作品は、2004年8月以降、

“www.ken-mai.com/kenneth/pcc.html” に置かれる予定である。

[1] 文部科学省ウェブサイト

“www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo3/siryu/006/03112701/007/001.pdf”